よい教師になるためには どうしたらよいか

秦　安雄

教師として教育というすぐれて人間的な仕事について、よりよい仕事をするよう、そのために、よりよい教師になるよう、誰でもが考えるでしょう。しかし、よい教師になるためにはたいへんな努力がいるものです。不断の忍耐強い仕事への努力が、積み重ねられていかなければならないきびしいものです。ここでは、教育実践をとおして学んでいく教師のあり方を述べてみたいと思います。

一、教師としての自覚

あらゆる教師は、教師としての自覚を持っているでしょう。この自覚のあり方は教育に基本的な影響を及ぼします。島小学校のすぐれた実践は、次のような女教師の自覚にささえられています。斉藤校長は述べる。「この先生たちも、この数年はひどく内攻的になってきている。……」「このことは、島小の女の先生たちが『すぐれた教師にならなければならない』という切実なねがいから、まともに自己追求をする結果で、やむを得ないことである。『すぐれた教師にならなければ』と思えば思うほど、個人として自分の力の弱さを感じるからである。」「こういうねがいの底にあるものは、島小の女の先生たちが、現実社会とのきびしいかかわり合いのなかで島小での実践をし、そこから、今の日本の現実をみ、将来の日本の民族を考えた結果として出てきた『自分たちは、将来の日本を背負って行く子どもたちを育てるという、何より大事な仕事に参加しているのだ』という自覚である。そのために、どうしてもすぐれた教師にならなければならないと考えていることである。」(1)と。

『何より大事な仕事に参加しているのだ』という自覚、『すぐれた教師にならなければならない』という自己追求的態度、これが現実の社会とのかかわり合いのなかで、実践をとおして出てきているのです。

教師としての自覚がよりはっきりしてくると、教育に対する情熱も更に増大するでしょう。教育という困難な仕事をささえるエネルギーは、教育に対する情熱です。情熱は困難に打ち勝つ不断の努力を生みます。よい教師になろうと努力する度合は、教育に対する情熱と相関関係にあります。また、教師が情熱をもって教育実践に従うとき、その情熱が深ければ深いほど、現実はより正しくその姿をあらわにするのです。「認識があってはじめて実践が可能になるのではなく、実践の過程で、その一歩一歩に応じて、認識もまた深まる性質のもの」(2)です。

二、教育の核は人間尊重

人間尊重ということが、コトハとしては知られていても、現実にはなかなか守られていないようです。とくに、子どもに対し、児童憲章に「児童は、人として尊ばれる。児童は、社会の一員として重んぜられる。児童は、よい環境の中で育てられる。」と、うたわれています。このことは、まさに、児童に対する正しい観念の不確立を示すものでしょう。子どもが、人間として尊重されにくい、人間性の否められた状況が存在するのです。だから、人間らしい人間に育てるために、否められた人間性を解放する教育が主張されるのです。ヒューマニズムに根ざした教育は人間尊重から出てきます。

ヒューマニズムに根ざした教育は、まず教師自身が人間的に生きることから始めなければなりません。それが先決です。教師が人間的に生きることなくして、子どもを人間らしい人間に育てる教育はできません。人間的に生きるということは、簡単にいえば、他人から命令されないで、自主的な判断を持つことといえるでしょう。したがって、人間らしく生きるという努力は、人間性をはばむ制度なり意識なりと戦わなければなりません。これを回避することは教師として失格です。

人間尊重の正しい教育は「子どもの内部に潜在しているあらゆる可能性をのぞましい方向に育くみ伸ばすこと」です。そのために教師は意図的な助成作用をします。

精神薄弱児の教育は、この十年間、めざましい発展を示しています。そのことは結構ですが、なお多くの問題をもっています。なかでも、知能の低い、IQ30くらいの子どもをみて「これは飼いごろしだな」「そんなのは施設にぶちこめ」「教育の対象でないよ」と平気でいう教師もまだいます。教師が「バカは何ともならん」と考え子どもに接するか、「知能は低くとも、それなりによい面を持っているはずだ」と考えて子どもに接するかではたいへんなちがいです。

普通学級の中で、成績の悪い子どもに対する教師の接し方に偏見はないでしょうか。精薄児であろうと、普通児であろうと、幼児であろうと「可能性を一杯に伸ばしてやる」努力が正しい姿で、頭からだめだときめてかかったり、差別があってはならないものなのです。はしにも棒にもかからないと思われた成績不良児を、教育に対する情熱と、失敗を教訓とする断えざる努力で、最優秀児に

し、なおかつ学級全員を最優秀ないし優秀児に教育しおおせた奇跡のような女教師の記録(3)は、ヒューマニズムに富む感動的な実践記録で、多くのことを教えてくれます。幼児においても「まだ小さいから」「この年令では無理だ」と頭からきめつけるのではなく、絶えず子どもの可能性を追求する努力をしていくことが大切です。

三、教師としての資質

すぐれた実践記録に出てくる教師の人柄は、教育につきない情熱を持ち、忍耐強い不断の努力、素直で謙虚、強情でなく、自尊心が強すぎず、機敏であって神経質でなく、明るくて、自信を持っていて、てらいなどない素朴さを持ち合わせている。このような人柄は、生まれつきのものではないようです。教育の現実に直面して、全力をあげてぶつかり、実践することによって、そうなってきたのです。いや、そうならざるを得なかったのです。絶えず、きびしい自己追求の中から、教師自身が成長し、変えられてきたのです。教育という仕事を進める中で、自分自身をのばし、すぐれた教師にならなければというねがいから、教師がいかに生くべきかを考え、教育をさまたげるあらゆる条件を排除する努力の中で形成されてきたのです。

具体的場面でよい教師は「子どもの要求を正しくくみ上げることができる」「子どもの発言をうまく取上げることができる」「子どもと本当に遊べる」「自分をそのまま出せる」「子どもの姿をありのままに観察し理解できる」「子どもに一方的に教えてやろうというのでなく、子どもの中から学ぶことができる」などなど、望ましいことは多く上げられます。このような事は、知識として頭に入れるだけでなく、具体的に教育現実の中で、一歩一歩実践をとおしてのみ身についてくるのです。「理想の教師は、現実にはいない。理想の教師に向かって、絶えず自己改造を志す現実には不完全な教師がいるだけであって、これが真の教師であり、望みうる理想の教師である。」(2)

四、教師の教育研究

教師は、まず第一に、正しく子どもを理解することが必要です。そのために、あらゆる機会に、利用できるあらゆる方法を使わねばなりません。が、とくに、教師は、心理学者がやるように、距離をおいて子どもをみているやり方でなく、具体的現実の中で、生のまま把握する方法、しかも、それが、主観に流れず、客観性を持たなければなりません。また教育実践の立場では、子どもを理解することそのものが目的でなく、それにもとづいて、指導の方法、対策をさがし出すことです。

子どもを理解する方法は、観察し、具体的に記録し、科学的分析をすることです。日常的観察は、子どもたちに対する具体的理解です。それは、見通しをもった計画に導かれた教育実践を裏づけるためのものです。何気ない子どもの日常行動の記録、計画された教育の記録の蓄積こそ、子どもの生きた姿を得ることができます。

子どもの日常的行動を正しく把握することはたいへんむつかしいものです。かなめは、全体的なつながりの中で行動をとらえていく

という観点です。例えば、無口な子どもがいて、その兄弟が無口だから、あの子も無口だと説明したとする。それだけの説明は非常に安易な考え方です。無口なら無口という現象をただ一つのみかたから割切るのではなく、家庭の状況とか、彼の過去の経験、その他、全体の関連で観察したものをみていくことが大切です。

実践的研究の場合、子どもの行動を理解するうえで、いま一つ考えなければならないことは、教師自身が子どもの行動に対する刺激条件になっていることの理解です(4)。つまり教師は、自分自身を含めて、観察しているのです。観察の主体であると同時に客体であるわけです。そういう意味で、記録は、子どもはこうしたということの記録だけで、自分の立場はちっとも記録していないと不充分です。観察の考察は、一そうむつかしい。「私は、子どもたちとあんなに遊んでいるのになぜ広ちゃんは『遊ばない』なんていったのだろうかと。いくら否定しても広ちゃんのいったことばが私の中に浮んでくる。私は、子どもと遊ぶということをもう一度考えてみた。子どもたちと同じことをしているだけでは子どもと遊んだことにはならない。遊んでいるときに、自分を、そしておとなを意識していては本当に子どもと遊んだことにはならないだろう。……と私は考えた。」(1)というようなことが多いのではないでしょうか。教育は相互的な行為であり、教えることによって学ぶという相互の関係があるのです。

さらに、教師の実践的研究の積極的面は、自分で、自分のやり方を創造していくということです。他人のやり方をまねて効果の上るものではないようです。具体的現実と対決することによって、自分なりの「型」を創造していくようです。島小のある女教師は同僚から「授業の型をよくもこう早くおぼえた」といわれたが、本当に「子どもが出ている」といわれるようになった時はじめて、「私は、はじめての研究授業で赤坂さんがいったことばを思いだす。私は子どもにくっついてそこから考えることをしないで、島小の財産である授業の「型」を、そのまま自分のやり方としようとした。かっこうだけとり入れて、それがつくり出されるまでの先生たちと子どもとの歴史を、わからないままですましていたのだ。」(1)という反省にあらわされています

最後に、教師集団のことについて、島小の実践にもあるように、すぐれた教育実践には、相互に信頼し、授助し合える力強い教師集団が、大きなささえになっていることをつけ加えます。

（日本福祉大学）

参考文献

(1) 斉藤喜博編　島小の女教師　明治図書
(2) 竹内　好　教師の役割と教師の自覚　岩波講座　教育　第8巻　岩波書店
(3) 金寿福　ある女教師の手記　朝鮮青年社
(4) 正木　正　現場における教育研究　大阪市教育研究所編
現場教師の教育研究法　大阪教育図書株式会社